

2003年度 A1プロジェクト および 学術フロンティア推進事業

学術フロンティア・コアプロジェクト
自己決定とQOL部会
代表者 望月 昭(文)

「自己決定とQOL研究会」では、障害のある個人に対する援助・教授設定を検討する目的で、以下のような実践・研究活動を行った。

1) 障害のある生徒における「自己決定」実現のための援助・教授設定の検討

2) ADHD児における集団遊びへの選択機会提供による参加支援

3) 障害のある学生や個人におけるコミュニケーション確立のための援助・教授設定の検討

ろう学生の講義保障のためのノートテイクに関する実践的研究

ろう重複の障害のある成人のための携帯メール/写メールを用いたコミュニケーションの研究

慢性失語症患者の地域における代替コミュニケーション(書字・携帯画面を用いた)成立の支援

HSPオンラインで行なうパソコン要約のための専門用語登録辞書ソフトの制作

4) HSPを利用した施設におけるQOL拡大のための討論

5) HSP上での、自己決定、QOL、そして

それに関連するコミュニケーション成立のための援助・教授に関わるデータベースの拡充を継続させた。

1)では、重い知的障害のある養護学校の生徒を対象に、既存選択肢の否定スキル獲得のための設定と教授プログラムの開発、2)では、集団遊びへの参加を選択機会設定によって促進するプログラムの検討を行った。3)は広義のコミュニケーション成立のための実践・研究であり、人的あるいは物理的援助設定(パソコン、携帯電話)を介在させた援助設定の検討であった。では大学授業場面、では日常生活場面を想定した実践研究が行われた。4)については、HSP上で施設環境におけるQOL拡大や行動問題への対処に関する課題等が国内の実践者・研究者の間で討論が行われた。

上記の研究内容は、実験的研究としては、1)2)の障害のある個人(生徒が中心)の「自己決定(選択決定)」の指導や設定の効果を直接的に検討したものと、3)の、学校場面や地域におけるQOL拡大を念頭においたコミュニケーションに関するもの、が挙げられる。

研究面での新たな展開として、1)2)では、従来、組織的プログラムが少なかった選択肢否定行動の教授プログラム、また適応的行動拡大のための「(おだやかな)否定の選択肢」導入の教授プログラムとその効果が確認された。いず

れも環境設定を自らが指定・拡大する要求言語行動（mand）の機能を備えた社会的行動としての「自己決定」行動に必要な環境設定やそのもとの教授プログラムを検討したものである。

3)の研究シリーズは、障害性の軽減やより積極的にQOLを拡大するための「援助設定」の開発や効果を検討したものであるが、3)では、ノートテイクという援助作業のパフォーマンスや効果を実証した初めての研究である。

では、文字、静止画の複数のモードを用いるコミュニケーション手段としての携帯電話の研究に関しては、初めての研究である。4)は、HSP上において限定公開の上で関係者が討論を行なう初めての試みであったが、こうした内容を、より効果的な援護活動としての機能を持たせるために今後は公開の方向で進めていきたい。

5)については、下記の臨床社会学プロジェクトの「第三者評価の議論」や「臨床社会学文献データベースとも連携した形で継続していきたい。

（今後の活動の見通し）

2004年度には、03年度までの研究成果を踏まえて実践研究をさらに展開するとともに、障害のある個人におけるQOL拡大を目指した自己決定とコミュニケーションの支援を中心課題として、対人援助実践の方法論について集約していきたい。援助設定の恒久的実現や援護活動、さらに諸専門領域との連携のためにHSPを基本とした情報交換と発信の方法を重点的に検討していきたいと考えている。

学術フロンティア・コアプロジェクト

臨床社会学研究会

代表者 中村 正（産社）

- 1) 参加者の個別の研究主題をもとにして、各分野での臨床社会学の追究をおこなった。臨床社会学的な主題としては、不登校、外見の研究、家族機能不全と家族再統合（里親など）、障害学、ホームレス問題、家庭内暴力問題などである。特に、研究方法としての「質的研究」に力点を置き、先行する研究のデータ化を射程におきつつ、研究をすすめた。これらはヒューマンサービス・プラットフォーム上の文献データベースとして蓄積することとした。
- 2) ヒューマン・サービスをめぐって生成している新しい pro-social behavior の実践（ボランティア、NPO、福祉機器援助、福祉サービス、ソーシャルサービスなど）を評価する研究をおこなった。とくに社会福祉法でうたわれた第三者評価（福祉施設でのサービスアセスメント）の問題を重視した。プロジェクト代表の中村が「第三者評価機構・きょうと」研究会にかかわり、研究をすすめた。とくに、価値財的要素、情報の非対称性、不確実性、個別性、公共性、非競争性（必ずしも競争になじむわけではない）という特質をもつサービス領域であるため、そのサービス評価については多元的な評価軸が必要であるとの見地から、基礎的な研究や論点整理について福祉施設経営者との共同研究をおこなった。その一部は応用人間科学研究科の公開科目としてもプログラム化し、社会との共同をおこなう地歩を築いた。この福祉サービス第三者

評価は、臨床社会学的なQOL評価として科学的に体系化する計画の一部である。さらにその内容はヒューマンサービス・プラットフォーム上にデジタル化して公開する予定である。

3)

(今後の活動の見通し)

1) 2004年度は学術フロンティア研究としてのまとめをおこなう。ヒューマンサービス・プラットフォーム上の臨床社会学文献データベースをさらに蓄積する。

2) 福祉サービスの臨床社会学的な評価研究については、さらに継続した共同研究をおこなう。第2回目となる公開研究会あるいは講座を福祉サービス実践者とともに組織し、その成果をヒューマンサービス・プラットフォーム上にデジタルデータ化し、社会との臨床の知をめぐる対話の場にする。

第1回研究会(2003.5.20)

テーマ：文献研究 ダニエル・ベルトー
『ライフ・ストーリー・エスノ社会学的
パースペクティブ』をめぐって

報告者：西田 心平(社会学研究科)

第2回研究会(2003.5.23)

テーマ：犯罪被害者問題と臨床社会学

報告者：河原 理子(朝日新聞編集委員)

修復的司法の流れを検討してきたこととのかかわりで、犯罪被害者問題について理解を深めることとした。とくに、法制度的な意味での権利の実現は法改正としてある程度具体化した。被害者の現実はそうした法律的次元のみならず、

社会的心理的な広がりの中で把握されるべきである。河原さんは犯罪被害者のおかれた現状について『犯罪被害者』(平凡社新書)などをとおして、法改正問題が社会的課題になる以前からその輪郭を丹念かつ精緻に把握されてきた方である。犯罪被害という体験をどのようなものとして記述することができるのかという基本的な問いから出発し、被害者援助ケアのあり方、社会制度による第2次加害防止の徹底、犯罪報道が被害者報道になっていることの問題、当事者同士によるネットワークの重要性、被害者のニーズとはなどについて、事例を交えながらはなしていただいた。

第3回研究会(2003.6.3)

テーマ：文献研究 『聞こえない親をもつ聞こえる子どもたち - ろう文化と聴文化の間に生きる人々』

報告者：中根 成寿(社会学研究科)

本報告は「臨床社会学とは何か」という本部会のテーマを深めるための文献レビューの端緒として設定された。「臨床社会学」とはア prioriに設定されるテーマではなく、すでにある研究の中でのある一定の枠組みを持つものを積み上げ、その体系をもって「臨床社会学」と考えていこうとする。

「本書が対象とするのは『聞こえない親をもつ聞こえる子どもたち』である。筆者自身も当事者(聞こえない親をもつ聞こえる子ども)である。本書のキーワードは『ろう文化』『家族』『世代』『役割のねじれ』『文化的アイデンティティ』などがあげられる。

聞こえない親をもつ聞こえる子についての今

までの研究は、結論が充分でなかったり矛盾したり憶測に近かったりした。研究の多くは、聞こえない親をもつことが子どもたちにどんな悪影響を及ぼすかを、客観的に記録しようとしてきた。(中略)彼らを『傷ついた親鳥に育てられる傷ついた雛』と決めてかかる何千もの質問に晒され続けてきた。それでいて、こうした人びとが自分の話を語るのを、研究者たちはめったに許さなかった。」¹

援助の対象があらかじめ設定されているのではなくて「援助の対象とは誰か」「そもそも援助を必要としているのか」という問いは臨床社会学に共通するテーマである。当該文献のような優れた当事者世界の記述は今後も継続していくべき課題である。

1 ポール・プレストン著 澁谷智子・井上朝日訳『聞こえない親をもつ聞こえる子どもたち - ろう文化と聴文化の間に生きる人々』2003 現代書館 p13

【中根 成寿(社会学研究科)】

第4回研究会(2003.6.10)

テーマ: 文献研究『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』
報告者: 伊藤 晴美(人間科学研究科)

箕浦康子編著(1999, ミネルヴァ書房)の文献研究である。一定の社会構造の中で展開する人間行動に注目し、マイクロジュネティックデータ(行為が常に変動する文脈に拘束され、道具や他者媒介され短時間のうちに変化する性質であること)をとるフィールドワークとそれに基づくレポートをマイクロエスノグラフィと呼ぶ。(p3)人々が生きている意味世界を微細なユ

ニット(一人ひとりの行為や語りなど)に着目して読み解く、解釈的アプローチであり、仮説生成研究である。ローカルな場で展開している個々の事例にこだわることは、特定の場で生活している個々人の行為や言葉、身体に刻印された形でグローバルな事象を出現させる。マクロな次元で事象を透かしてみせることにより、マイクロ、マクロの関連性を描くことが可能であり臨床社会学においても有効な研究法と考えられる。

【伊藤 晴美(応用人間科学研究科)】

第5回研究会(2003.6.17)

テーマ: 親になることと妊娠・出産期のケア
~R.ルービン『母性論: 母性の主観的体験』から
報告者: 松島 京(ポストドクトラルフェロー)

第6回研究会(2003.10.7)

テーマ: ヒューマンサービスプラットフォームのデータベース構築に向けて
報告者: 浜田 健右(応用人間科学研究科)
中島 清美(社会学研究科)

学術フロンティア・コアプロジェクト
対人援助学の理論・方法・歴史
代表者 佐藤 達哉(文)

心理学のみならず、社会学、科学史、統計学の専門家でチームを組み、対人援助学の理論・方法・歴史について広範な検討を行った。

質的研究が対人援助学を学範知におしあげる突破口であるという認識に立ち、質的研究の行

い方について数回のワークショップを行い、公開シンポジウム・公開講演も行った。

また、本学客員教授・バルシナー氏の講演・シンポジウムを企画し、文化心理学のあり方について理解を深めることができ、この理論が対人援助学に対してもきわめて有効であると見通しを持つことができた。現在は心理学の方法論に関する論文を執筆中である。

文化心理学という立場から見た「サンプリング」問題を考究することが、対人援助の実践知を学範知に結びつける手がかりになるという見通しを持つことができた。

科学社会学においては、社会と学問の関係を重視するモード論が、人々の科学技術等への理解（パブリック・アンダースタンディング論）ひいては、科学技術ガバナンス論へとつながっていくという道筋の理解を行った。

その上で、モード論、パブリック・アンダースタンディング論、ガバナンス論を、狭義の科学技術にとどまらせるのではなく、人文・社会系科学の領域にも適用することの意義が確認できた。情報発信側の社会的責任論にもつながるものである。

「障害の科学」史の取り組みとして、戦前の厚生省・軍事保護院について調査を行った。

（今後の活動の見通し）

来年度は本研究全体における連携についてのあり方についても考察を深めつつ、収束させたい。

第1回研究会（2003.9.5）

テーマ：フィールドでの〈声〉をどのように聞くのか？ - 「加工」以前の現場覚え書き -

報告者：宮内 洋

（札幌国際大学人文学部専任講師）

草山 太郎（大阪体育大学短期大学部

介護福祉学科専任講師）

第2回研究科（2003.11.8）

テーマ： 中学校保健室の今日的機能と

養護教諭の役割

- 『逸脱』『問題』とされる生徒が訴えたこと、見つけたかったこと -

環境問題解決への一考察

- 環境ボランティアからのアプローチ -

語られる「望む性を生きる」自己

- 性同一性障害者の場合 -

「不妊」経験の塞著述

- 不妊治療経験者の語りから -

報告者： 伊藤 晴美（応用人間科学研究科）

西尾 孝明（応用人間科学研究科）

涌井 幸子（応用人間科学研究科）

安田 裕子（応用人間科学研究科）

修士論文の構想発表会であった。各報告者から、参与観察やインタビュー等質的手法に基づく研究が発表された。発表内容は構想途上のものであったが、研究会に来られた方々からの指摘や感想により、各発表者は今後の研究に示唆を与えられたようであった。また、その活発なやりとりそのものが非常に勉強になったという声も挙がり、質的研究にはこうした相互議論が重要であることが痛感された。質的研究は、発展可能性を含むものであり、分析視点によっては視野が広がっていくことが十分にあり得る。それが質的研究の醍醐味と言えるだろう。4名の発表者が、どのような形で論文にまとめ上げ、

また今後それをどのようにつなげていくのが、非常に興味深く感じられた。今後も、こうした研究会が開催されることを期待する。

第3回研究会(2003.12.10)

テーマ：多変量データ解析の新たな方法：

個人で異なる刺激・評定項目を用いた多重属性知覚マッピング

報告者：Michel Van de Velden

(Pompeu Fabra 大学研究員)

対人援助学をはじめ人間科学におけるデータの分析において、多変量解析は重要な方法論となるが、Van de Velden 博士は、多変量解析の1つである正準相関分析法をさらに一般化した方法を考察し、この方法について講演を行った。考案された方法は、例えば、複数被験者が、種々の対象人物(刺激)を、「協調性」や「勤勉性」といった項目について評定した結果から、各刺激の特徴を表すスコア、および、項目のウェイトを算出する方法である。こうした分析は既成の方法でも可能であるが、刺激や項目が被験者間で異なるケースにも適用できることが、考案法の特徴である。上記のようなケースは、例えば、ある被験者が、対象人物の一部を知らない、また、特定の項目について評定を行えない場合などに生じる。講演では、以上の方法の数理的基礎が解説された後、方法の精度を調べるためのシミュレーション研究や、社会的認知のデータへの適用例も報告された。

【足立 浩平(文学部教授)】

学術フロンティア
臨床教育プロジェクト
代表者 中川 吉晴(文)

公開の研究会は以下のとおり16回開かれた。当初、予定していた回数(5回程度)の3倍におよぶ開催数となった。ほとんどが学外の専門家によるもので、成果の多い年度となった。詳しくは別表を参照。

自己発見ワークショップ3 佐貫幸代ほか
(応用人間院生)

自己発見ワークショップ4 佐貫幸代ほか
イラク戦争を日本の子どもたちはどう見たか
川手鷹彦(治療教育家)

文化の核心としての治療教育 川手鷹彦
身体ほぐしワークショップ 五十川啓子
(身体技法研究家)

芸術による自己変容 アートワークショップ
松田佳子(教育哲学者・芸術家)

治療教育の実際1 悪と死の哲学 川手鷹彦
治療教育の実際2 アスペルガー症候群について 川手鷹彦

実存とコスモス 建設的ポストモダニズムと
実存の次元 林貴啓(教育哲学研究者、京大院)

「体験をすすめる言葉」を見つける ワーク
ショップ 村川治彦(心理学・身体学者 米
国在住)

シュタイナー教師養成コースで学んだこと
吉田ゆきえ(教育家・養成課程修了者)

ヨーガ・ムーブメント・アート ワークショ
ップ スーザン・アレン、スシオワン(教育家・
芸術家)

「何もしないこと」から「何もしないこと」へ 野口整体の健康観を中心に 本庄剛(教育人間学研究者)

キッズ・ゲルニカ・ワークショップ キッズ・ゲルニカへの国際的取り組み 金田卓也(芸術教育)

治療教育の実際3 「真夜中の銀河鉄道」実技と討議 川手鷹彦

治療教育の実際4 同上

今年の研究会の特徴として、ワークショップがふえ、とくに芸術活動の臨床教育的側面と、身体技法の臨床教育的側面が研究された。現在、もっとも注目される治療教育家である川手鷹彦氏による研究会は6回 2日連続が3回 におよび、治療教育の実際について多くを学ぶ機会が得られた。ほかに、建設的ポストモダニズムや、シュタイナー教師養成といった先進的なテーマがとりあげられた。また、特筆すべき活動であったのは、キッズ・ゲルニカ・ワークショップであり、これにはキッズ・ゲルニカ国際委員会代表の金田卓也大妻大学助教授も来て、講演のみならず、ワークショップを最後まで指導していただいた。このワークショップは、教育と芸術と社会活動が結びつくものとして、臨床教育のひとつの有効な実践形態となるものであることが立証された。なおこのワークショップは、朝日新聞、京都新聞、NHK ニュースでもとりあげられた。

後期公開企画 ケアがつなくもの・ひらくもの

臨床教育部会は、上記の公開企画を応用人間科学研究科と共催した。これは、伊勢真一監督によるドキュメンタリー映画(3本)の上映を行なったものであるが、いずれの映画も、障害

者の自主的な共同体づくりが取り上げられており、臨床教育に不足しがちな社会的視座について、多くの有益な示唆がえられた。なお企画では、伊勢監督自身にお越しいただき、映画と共同体にまつわる話をうかがった。

林信弘教授による臨床教育の実践研究は、昨年度に引き続き、定期的に毎週継続して行なわれた。トレーニングルーム1を使用した。なお参加者のほとんどは院生である。

(今後の活動の見通し)

これまでの臨床教育サブプロジェクトにおける研究を総括する意味をもって、代表の中川が単著『ホリスティック臨床教育学』を年度内に刊行する(せせらぎ出版)。すでに、ここ数年の活動から原稿はそろっており、2003年度の予定をほぼ充たしている。なおこれは、2004年度科研費の出版助成に応募するとともに、2004年度の立命館大学研究助成出版物として採択されている。また、中川は、同著の実践編として、『ホリスティック・アプローチ』(仮題)を刊行予定(駿河台出版)である。ほかに、アメリカから、本年度刊行予定の共著の依頼を2件受けている。

林教授の研究会活動は、最終年度も継続して行なわれる。なおこの活動は、立命館の学内公募型研究プロジェクトとして申請された「行の総合的研究」に受け継がれる予定である。

最終年度も、研究会活動は、随時行なう予定である。

第1回研究会(2003.4.26)

テーマ:「自己発見ワークショップ3」

報告者:佐貫 幸代(応用人間科学研究科)

3時間で5つのアクティビティーを行った。三部構成とし導入と、本体と、終結を設けた。導入（アイスブレイキング）では絵で今の自分を表すものと、相手の名前を呼び返事が返ってきたらボールを投げて全メンバーにボールを回すというものを行った。ねらいはお互いの顔を名前を覚えることと、お互いに関わり合うことへの抵抗を減らしていくことの2つであった。アンケートによると最初は非常に不安を感じていた参加者が早い段階で安心を感じていた。また自分を表現しやすかったので楽しかったという感想もあった。本体では石を擬人化して表現するものと3人のグループで体を使って機械を表すというものを行った。ねらいは自分の気持ちが物に投影されることとグループでの協力の仕方とに改めて気づいてもらうことであった。アンケートによると参加者は自分自身に当てはまるキーワードを知らないうちに使っていたり、自分の行動の反省を行っていたりした。

【佐貫 幸代（応用人間科学研究科）】

第2回研究会（2003.5.24）

テーマ：「自己発見ワークショップ4」

報告者：佐貫 幸代（応用人間科学研究所）

今回は二時間半で8つのアクティビティーを行った。構成は三部構成とし、導入と、本体と、終結を設けた。導入では3つのアクティビティーを行った。一つ目は、一人が自己紹介をするたびに、その人の好きそうな食べ物や出身地をほかのメンバーが勝手に想像して言う、というものを行った。狙いは第一印象の勝手な思い込みがどう真実からかけ離れているか、そして自

分が人にどのような印象を与えているのか、を知ることである。次に瞑想をし、今の気分に向き合ってもらい、それを紙の上に表現してもらおうというものを行った。これは終結にも取り入れて、最初と最後の気分の変化を見てもらった。次に本体では4つのアクティビティーを行ったが、中心にすえたのはペアで、片方が目隠しをして散歩するというものにした。ほかの3つはそのためにより身体接触になれるものを行った。狙いは信頼感を感じるということ、目を閉じたままで色々なものにふれ、純粋な感覚を楽しむことであった。

【佐貫 幸代（応用人間科学研究科）】

第3回研究会（2003.6.6）

テーマ：「イラク戦争を日本の子どもたちはどう見たか」

報告者：川手 鷹彦

（芸術言語セラピー研究所「青い丘」主宰）

本研究会では、治療教育学である川手氏の実践の中で、氏が体験した日本の子どもたちの状況と変化についての報告があった。加えて、子どもの置かれている困難な状況に対して、大人たちがどのようにかかわることができるのか、示唆に富む提案が為された。有意義な内容の研究会であったことを明にしておきたい。

【中川 吉晴（文学部助教授）】

第4回研究会（2003.7.6）

テーマ：「文化の核心としての治療教育」

報告者：川手 鷹彦

（芸術言語セラピー研究所「青い丘」主宰）

本日の研究会では、川手氏の方から、治療教育の本義について、そして治療教育が持つ教育の本質的意味について話しがあつた後、それと関連して、常識や通常の見方をくつがえす視点の重要性についての話しがあつた。教育を単に社会の一機能として捉えるのではなく、社会の構造化された歪みを突破する一つの契機として捉えている点が、今日の活動の中から特に意味をもつ点であつた。

【中川 吉晴（文学部助教授）】

第5回研究会（2003.7.19）

テーマ：「身体ほぐしワークショップ」

報告者：五十川 啓子

（ミッテ主宰・竹内俊晴演劇研究所修了生）

「無理をしない、自分の限界、境界線に気付く、人と比べない」と思いながらワークをする、という事で始まる。まず、ボディアート。自分の体の様子をクレヨンで描き、発表する。次に横になり軽く目を閉じる。足首から頭の先まで徐々に意識を向けていく。畳に体をゆだねた後、体全体に力を入れ再び抜くというのを数回繰り返す。ゆっくり立ち上がり少し歩く。その間目は閉じたまま。立ち止まり、その場所と周りの人数を推測して目を開ける。その次はペアになり背中合わせで座る。相手の背中を感じ、そのまま手を使わずに立つ。そのペアで片方が横になり、腕の力を抜いて相手に任せる。また片方の頭を持ちあげ、左右に少し動かし手前にひく；。それぞれ互いにやり合う。その後、うつぶせになった相手の上に背中同士が重なる感じで乗る。軽くストレッチ。最後、もう一度ボディアート。はじめの絵と比べてみて発表し終了。

【塩谷 綾子（応用人間科学研究科）】

第6回研究会（2003.10.10）

テーマ：「芸術による自己変容 /

アートワークショップ」

報告者：松田 佳子

（トロント大学大学院博士課程修了）

現在、多くの人は頭の声に従って毎日を過ごしている。頭の声とは、松田さんによると何事をするにもその都度理由を考えたり、一貫性を求めたり、他と比較したり、結果のことを言ったりする声のことである。そういう声ばかりに支配されてしまうと、自分の正直な気持ちがわからなくなってしまふのである。逆に、ハートの声とは、人により違ふがお腹の下の方からわいてくるイメージがあり、温かくて、理由をぐちぐち言わない、安心感をもたらす声である。今回、そのハートの声に耳を傾け、その声に従い筆やクレヨンを動かすというワークであつた。これは、自分の正直な気持ちを感じるという体験であり<unlearning>の課程であると説明された。ワークは、自分が本当に心地良いと思えるものや自分自身の発見に導くものであつた。

【塩谷 綾子（応用人間科学研究科）】

第7回研究会（2003.11.3-4）

テーマ：「悪と死の哲学」

「アスペルガー症候群について」

報告者：川手 鷹彦

（芸術言語セラピー研究所「青い丘」主宰）

バリ島には儀式とも言える祭りがある。その祭りには現代人が失つたものが存在する。元々

祭りとは神々への捧げを意味し、人々の穢れを祓うものとして行われる。川手氏が舞う魔サランダの舞は、まさにその意味合いが濃い。また祭りは楽しむものだけではなく人々の穢れを祓うというように、ランダは人々の悪や罪を吸収し舞う。舞は人々に畏れ生む。畏れは同時に畏敬となりこの舞を体で感じることで神々へ畏敬の念を抱き自らの浄化を行う。この祭りから氏は現代社会における少年犯罪に通じるものを見る。つまり魔女ランダの役割を少年たちが担っており、少年による犯罪は、心の中に潜む闇が行き場をなくした結果だと言う。氏は演劇、芸術活動を通じ心に傷を持つ子どものケアを行っており、人間の衝動や心の傷を演劇という形で人々に訴え、同時に演じる側も浄化されると考えている。

【塩谷 綾子（応用人間科学研究科）】

第8回研究会（2003.11.5）

テーマ：「実存とコスモス

- 建設的ポストモダニズムと〈実存〉の次元」

報告者：林 貴啓

（京都大学大学院人間・環境学研究科研修員）

本研究会では、アメリカで現在おこっている建設的ポストモダニズムの動向が紹介され、あわせて、林氏の関心領域であるフランクルの実存思想に対する考察が発表された。林氏は、両者を結び合わせる考察を展開し、それに対する質疑が積極的に交わされた。本研究会は、臨床教育の哲学的な基礎づけにかかわるものとして、極めて有意義であったと思われる。

【中川 吉晴（文学部助教授）】

第9回研究会（2003.11.7）

テーマ：「体験をすすめる言葉を見つける」

- ワークショップ

報告者：村川 治彦

（Ph.D./Center for East-West Dialogue 代表）

自分が体験したことを言葉で表し、それを相手に伝えるという行為がある。今回、自分の体験を感覚を通じた言葉で伝える方法としてジェンドリンが提唱したフォーカシング技法にあるフェルトセンスを村上氏は説明された。それは、常に今ある感覚ではあるが、五感では捉えられない、あいまいなものとして説明される。ワークは、始め小グループになり、「箸の使い方」「自転車の乗り方」などを言葉で教える。次はペアになり、最近食べておいしかったものを同じく言葉で伝え、さらにその時を思い出し自分が感じた感覚を伝える。これは、普段あまり表現されない体験を説明する。ある体験に入り込み、感覚の中から現れる言葉を見つける。感覚から出た言葉は、頭で考えていないため、非論理的だったり辞書的な意味でなかったりする。だが、それにより人間の全体性を表しており、その言葉を発することで「からだ」と「こころ」のつながり合いを感じることができるのである。

【塩谷 綾子（応用人間科学研究科）】

第10回研究会（2003.12.8）

テーマ：

「シュタイナー教師養成コースで学んだこと」

報告者：吉田 ゆきえ

（トロント・シュタイナー・センター
教師養成コース修了）

トロントのシュタイナーセンターは、ある程度経験のある人を入学者として受け入れるため、

他と比べ短い1年間で終わることに特徴がある。そこではまず7月に3週間のコースに参加をしてから9月に始業式を迎える。だいたい午前が講義で午後はペインティングなどが行われる。ある実習で2年生を対象に、全ての子どもに分からせたいとの思いで授業を進めていたところ、2/3の子が分かった時点で次のステップに行くよう指示される。授業は全体を引っ張って行くことが大事であり、その時にわかることだけ教えるのではなく、もっと多くのことを教えてよいとのこと。また、教師は子どもに影響を与えるため、文字の書き方や言葉を発するタイミングなどにもシュタイナーの思想に基づいた細心の注意を払っていくことが必要とされた。

【町田 協子（応用人間科学研究科）】

第11回研究会（2003.12.19）

テーマ：「ヨーガ・ムーブメント・アート
- ワークショップ」

報告者：Susan Allen & Susiawan
(Me & My Shadows 主宰)

はじめに、植物を囲み、ヨーガの中の1つである呼吸法を使ってボディーワークを行った。次にリレーアートを行った。これは、各自が自己の内面に目を向け、自由に画用紙に描く。その画用紙を反時計回りに7枚回し、回ってきた作品に色を加える。その作業を4回繰り返す。3人のグループを作り、各班で3つの絵を1つの絵として表現する作業を行う。各班ごとにコメントを発表する。おわりに、音楽に合わせて、2人1組となり、チューブを使ったボディーワークとシャドウワークを行った。そして、最後に呼吸法によるボディーワークを行いながら、

呼吸を整え、終了。まとめとして、ディスカッションを行った。

【渡辺 亜里紗（応用人間科学研究科）】

第12回研究会（2004.1.11-12）

テーマ：「キッズゲルニカ・ワークショップ」

報告者：金田 卓也
(大妻女子大学家政学部児童学科助教授)

今ワークショップは、小児から大人まで含めて、のべ150～200人くらいの人に参加した。ゲルニカ、サイズの絵は完成し、そのプロセスを通して参加者一人一人が、平和と芸術、教育のことに注意を向け、自己を実現し、成長する機会を得た。とりわけ企画、実行にあたった文学部教育人間科学専攻の学生にとって大いに成長体験となるものであった。本とりにくみは、朝日新聞(全国)、京都新聞、読売新聞の取材を受け、NHKのニュースでもとりあげられた。大学の理念(平和)ともあいまって、貴重な試みであったと考えられる。今回、代表の金田先生をはじめ、キッズゲルニカ生みの親である阿部、山口、大浦といった先生方もおこしになり、一連のキッズゲルニカワークショップの中でも、よい企画となった。

【中川 吉晴（文学部助教授）】

第13回研究会（2004.1.7）

テーマ：「『何もしないこと』から『何もしないこと』へ」～野口整体の健康観を中心に～

報告者：本庄 剛
(大阪国際福祉専門学校非常勤講師)

「何もしないこと」とは一体どういう状態で

あるのか。言い換えれば「無為自然」である。例えば、自然農法がある。そこでは全く肥料は与えないし、雑草もひかない。しかし、だからといって誰が行ってもうまくいくとは限らない。ではその「何もしない」という言葉の中に何か奥深く隠れた、と言うのか、分かる人には分かると言うのか。しかしそういうモノが事実ある。本庄氏は、そのモノを自分が納得できる形で表現することを探求し続けている。野口整体には、「天心」という考え方がある。野口は誰もが持つと言う。だが言葉ではうまく表現しきれない。本庄氏はあえて言うなら直観や智恵というのかもかもしれないと言う。それは子育て、教育、治癒の中に今まで生きてきた中で忘れてしまった各人の天心を見つけることが出来る。私達は、それらを通して天心という状態を知り、そこから「何かする」あるいは「何もしない」という選択へ進むことが望ましいと野口氏は伝えているのかもかもしれない。

【塩谷 綾子（応用人間科学研究科）】

第14回研究会（2004.2.1-2）

テーマ：「真夜中の銀河鉄道」実技と討論

報告者：川手 鷹彦

（芸術・言語セラピー研究所「青い丘」主宰）

1日目の始めに行われた川手氏の独演会は、宮沢賢治の詩『春と修羅』の朗唱であった。ドイツ語を交えた朗唱は賢治が大切にした言葉の音とリズム感を見事に伝えていた。また賢治が詩を通して私達に伝えたかったものを感じる事ができるものだった。次に行われたのは氏が戯曲化した賢治の童話『銀河鉄道の夜』を参加者が実際に声に出し表現するワークショップであ

った。このことで賢治の世界を体験し、言葉の中に秘められた力を感じることが出来たのである。2日目の討議では、芸術的なものは頭で考えるのではなく感覚や感情といったところで感じるものである事を説かれた。そして子供達の心に煌き輝いている叡智の声に触れ守るためには、自らが失ってしまった心の奥にある「小さな火」を取り戻し磨くことの大切さを言われたのである。

【塩谷 綾子（応用人間科学研究科）】

学術フロンティア
ライフデザインプロジェクト
子どもプロジェクト
合同研究会

第1回研究会（2003.6.21）

テーマ：「子どもの育ちを保障する場

としての24時間保育

- 親の社会的生活・家庭生活との関係から -」

報告者：谷 章子（特定非営利活動法人子どもの森幼稚園園長）

鈴木 理恵（蜂ヶ丘保育園保育士）

千葉 郁子（東大阪市児童部児童課

母子自立支援員）

前田 信彦（産業社会学部助教授）

当日午後に行われたシンポジウムの問題をさらに深めるために、シンポジウムの問題提供者から詳しい内容が報告された。24時間保育施設の園長をつとめる谷章子氏からは、保育内容や職員のシフトや研修などの改革について詳しく報告された。谷氏、昼間開設の保育園に勤務

する鈴木理恵氏、東大阪市で母子の生活の問題についての相談業務に携わる千葉郁子氏からの報告に共通する問題として、子どもの健全な生活を保障するために、親の生活について理解していくこと、また、親に子どもの成長を実感してもらうことの重要性が見出された。

【高田 薫(文学部)】

学術フロンティア
子どもプロジェクト
代表者 高木 和子(文)

当プロジェクトでは、(1)子育て支援・親の育ち・子どもの育ち合い、(2)療育援助、(3)思春期援助の3グループ構成で活動を進めてきた。各グループでは、(1)就学前の子どもを養育する立場にある者、(2)自閉症など関わり合いに難しさのある子ども、(3)中学生・高校生など思春期の発達課題を抱える者を援助する立場にある者(教師)など、研究対象は異なっている。しかし、援助する者が主体的に問題に取り組む過程を援助し、またその様相を明らかにするという点で共通点を持っている。また、2002年度からは研究視点の再構築と精緻化の必要からライフデザインプロジェクトとの情報交換をすすめてきている。

2003年度では、親の育ちを考える際に、就労など親の権利を保障するという側面と子どもの暮らしを保障する側面との両方を考慮に入れる必要があることから、6月21日に24時間保育についてのシンポジウムを開催した。このシンポジウムでは、長時間保育の是非を問うことを目的とするのではなく、すでに起こってしまっ

た現象についての我々の理解を深め、今後に生かしていくことを目的とした。参加者は80名とそれほど多くはなかったが、毎日新聞の大阪版にとりあげられるなどの、反響をよんだ。24時間対応型の保育や一時保育などの現場での問題にどう対応していくのかを社会システムの問題としてではなく、子どもと大人の育ちの問題として取り上げていく視点が明らかにされてきた。

このシンポジウムの報告を含めたわれわれの研究グループの成果を、子育て支援につながる研究を主体にして論文としてまとめ、『人間科学研究第6号』(3月発行予定)の特集号に掲載予定である。

それ以外での各グループの研究活動は以下のとおりである。

子育て・親育ち・共同グループでは、子どもと接するときの大人側の読み取りに関するデータの収集と分析を行なう。一つ目、2年前より始めた保育園児の砂場の観察データを「大人の支援を引き出す子どもの行動」という側面から検討する。二つ目は、保育園乳児クラスでの子どもと大人との関わりの中で、大人が子どもの行動の意味をどう読み取っているのかについて観察・分析する。

三つ目の柱として、山形市のNPO法人山形育児サークルランド「子育てランドあーべ」と山形市立つばさ育児支援センターとの協力をえて、山形における育児支援活動の実態と参加する人々の育ちの実態調査を開始した。

療育援助グループでは、自閉傾向のある幼児同士の関わりへの介入と援助を目的とした活動を社会学研究科と応用人間研究科の院生を中心にした「あひるクラブ」をたちあげて始めている。

思春期援助グループでは、中学生の学校相談場面におけるチーム会議の展開および、不登校の親の会における活動への援助とその分析を行っていく。後者の研究成果は前出の中間報告に載せられている。

これら現在進行中の研究については、2005年3月の最終報告書にはまとめられる予定である。

第1回研究会(2003.5.7)

テーマ:「成人期の発達について」

報告者:小倉 直子(文学部心理学専攻)

岡本祐子氏の著書2冊についての交換レビュー。親のアイデンティティの4パターンを中心に報告が行われた。「アイデンティティ」という視点から発達を捉えることの長所と問題点が話し合われた。さらに報告者の卒業論文の今後の展望について話し合われた。

【高田 薫(文学部)】

第2回研究会(2003.6.13)

テーマ:「2歳児の ふり の発達
- 模倣・ふり・遊びとの関係から」

報告者:荒井 庸子(応用人間科学研究科)

乳幼児のふり遊びに関する研究は、子どもの象徴能力やごっこ遊びとの関連において多く議論されてきたテーマである。そして、1985年以降「心の理論」の提供により、子どもが他者のふりを理解し自分でふりをすることが「他者の心」の理解を示すケースとして議論されるようになった。本研究では、子どもがその「他者の心」の存在に気づいていく過程を、1歳児におけるふり遊びの発生について議論する中で検討

していくこととした。先行研究より、ふりの発達段階を「他者の意図理解」との関連から考察した結果、1歳台においては1:0~1:2、3ヶ月(相手がふりをしているという理解ができない)1:3、4~1:6(相手の意図を理解しようとする)1:6~2:0(相手がふりをしていることを理解し、自分でふり遊びを展開し始める)という3つの段階に分けられるとする仮説を立てた。予備実験では、上記した仮説をある程度支持する結果がだされたが、相手の意図理解に関しては評価しにくい点が多く、今後の研究の進め方として評価軸の確立と実験の再検討が課題とされた。

【荒井 庸子(応用人間科学研究科)】

第3回研究会(2003.7.16)

テーマ:「今年度前期の活動報告と
今後の展望について」

- (1) シンポジウム『24時間保育から考えるこれからの子育て・子育て』から見えてきた問題点とこれからの「大人の育ちと共同のありかた」に関する議論の枠組みについて高木和子氏から提案がなされた。
- (2) プロジェクト研究の中間報告について。3年間でなされたさまざまな子育てのフィールドにおける大人の育ちに焦点を当てた研究(主に調査)を中間報告としてまとめることについて話し合いがなされた。

【高田 薫(文学研究科)】

第4回研究会(2003.9.29)

テーマ:「不登校へのネットワーク支援と『父母の会』-子どもと向き合う大人が変わるとき

報告者：春日井 敏之（文学部教授）

松岡 知子（大阪大学大学院生）

高田 薫（文学部心理学科実習助手）

不登校の子どもを抱える親と教師らが組織する、「父母の会」に参加する保護者の、子どもや自分への向かい方の変化について、不登校問題の背景も踏まえて報告していただいた。参加している中で、他の参加者に本音を言える間柄へと変わっていくことが変化の契機になっていることが述べられた。

このプロジェクトも 2002 年度から始まった。研究パートナーは京都障害児放課後ネットワーク(代表玉田眞紀美)である。学校 5 日制が完全実施され、障害児も地域や家庭で過ごす時間がさらに増えた。土曜日の休日は、毎週の「連休」をどう過ごしていくのかという問題とともに、地域で障害児・者に現在どんな制度や居場所が必要なのかを改めて障害家庭やその関係者へ提起している。

フロアからは、「父母の会」の参加者である、いわゆる息切れ型の不登校とは異なる、生活基盤が壊れてしまっているために学校へ行くことができない子どものことが指摘された。学校内での教師やスクールカウンセラー、家庭、地域での居場所づくりなど、子どもが生活するさまざまな場所でのネットワークの整備の必要性が認識された。 【高田 薫（文学研究科）】

この研究プロジェクトでは、京都や全国の制度実践を臨床場面として障害児の放課後ケアの課題にアプローチしている。昨年来実施してきた小中高等学校に通う京都の約 4 千人の障害児家族へのアンケート調査と聞き取り調査、障害児の放課後ケアを全面的に支えている京都の学生たち(約 500 名)への活動参加の振返りと障害児の放課後ケアへの問題意識を問うアンケート調査について、ようやく結果をまとめることができた。『障害児の放課後白書』(2004 年 3 月、クリエイツかもがわ、1000 部)と題して刊行した。

公開講演会（2003.10.2）

テーマ：「ベトナムにおける障害児教育の現状」
「ベトナムの大学と学生生活」

報告者： Nguyen Thi Hoang Yen
Dinh Quang Bao

第 8 回研究会（2003.6.7）

テーマ： 京都市内障害児学童保育クラブ
「ぼちぼち」

JAM 青年協議会

「寺内製作所労組の夏祭りでの取り組み」

報告者： 沖田 友子

大岡 功治（寺内製作所労組）

第 5 回研究会（2003.2.19）

テーマ： 研究報告会

『立命館人間科学研究』第 7 号発行にむけて

報告者： 高木 和子（文学部教授）

津止 正敏（産業社会学部教授・

ライフデザインプロジェクト代表）

櫻谷 眞理子（産業社会学部教授）

春日井 敏之（文学部助教授）

吉本 朋子（京都市スクールカウンセラー・非常勤講師）

呉竹養護学校に通う子ども・卒業生と、親・学生指導員で作る、京都市内の障害児学童保育

クラブ「ぼちぼち」と、金属系機器の労働組合が集まる「JAM 京都青年協議会」から報告していただいた。

「ぼちぼち」からは、肢体障害をもった子どもたちが楽しく活動できるための工夫」など写真で様子を伝えてもらいながらお話いただいた。現在困っている事は、活動場所の確保（重度の子が多いため、活動できる場所が限られている）や、ボランティアの不足や質の向上との事であった。現在行われている支援費制度にも議論がおよび、今後を考えていくうえでも大変参考になった。

「JAM 京都青年協議会」は、昨年6月に放課後ネットに京都市ボランティア情報センターを通

学術フロンティア
ライフデザインプロジェクト
（京都障害児放課後研究プロジェクト）
代表者 津止 正敏（産社）

じて「ボランティア活動で何かお手伝いできないか」と、呼びかけをして下さったことから関わりが始まった。初めて障害児に関わるみなさんが様々な模索と苦勞をしながら、障害児を受け入れて経過を、昨年8月に開催された伏見区の寺内製作所「夏祭り」での取り組みを通して発表していただいた。「トレイは？」「送迎は？」初めてぶつかる素朴な疑問に親たちの予想外の動きも加わって、寺内製作所労働組合青年部のみなさんの奮闘に涙と笑いがいっぱいあふれた楽しい報告になった。障害関係者以外の方々とつながれるということは、とても楽しく、元気が出るものだという感想が出された。

第9回研究会（2003.7.5）

テーマ： 「公設学童保育の京都、全国の状況と障害児受け入れにおける課題」
「障害をもつ子どもを受け入れて」

報告者： 松井 信也
（京都学童保育連絡協議会 事務局長）

第10回研究会（2003.9.7）

テーマ： 滋賀県草津市障害児クラブ
「元気玉クラブ」活動報告
京都放課後・休日実態調査
参加者交流会

報告者： 家永 理津子（元気玉クラブ指導員）

滋賀県草津市で1994年から活動を始めている障害児学童保育の活動について、指導員さんからお話をきいた。現在、養護学校・地域の障害児学級に通う小3～高3の21名が利用していて、「元気玉ハウス」という拠点を、「草津市手をつなぐ育成会」と共同で（「障害者地域生活訓練事業」をするため）所有し、月曜～土曜までの平日、ほぼ毎日開所しています。（長期休暇は、水・土曜のみ）2002年度からは、お隣の栗東市でも同様の活動を展開しています。

実践内容では、子どもの「やる気」を引き出すために、例えば調理では、材料の選定・買い出しから最後の後片付けまで、できるだけ子ども自身で出来るようにしたり、電車に乗っての遠出が好きな子が多いことから、「嵐山のトロッコはよく乗りに行く、みんなとてもいい顔をしている」など色々報告された。保護者からの聞き取りでは、「家庭以外で、指導員や友達と過ごす事により、自分自身の思いを表現する力が育

ってきた。また、ありのままの自分を受け入れてもらうことにより、人に認められたいと思われる行動や人のことを考えられる余裕も出てきた」や、遊びを楽しむという余暇を持ちにくい障害児の保護者から、「元気玉から帰ってきてごはんを2杯も食べてぐっすり寝てくれたんですよ」と、うれしそうだった。と、報告された。

現在いちばん問題となっているのは資金。草津市から年間94万円ほど補助金を獲得できているが、運営には年間340万円ほどかかるそうで、地域の学童の3倍くらいの値段の保育料を保護者から頂いても、まだ赤字だそうだ。次に問題になっているのは人の確保。特に水曜日は活動人数が多いので獲得にとっても苦労しているとのことであった。

第11回研究会(2002.12.3)

テーマ： 城陽市委託レスパイト事業

「なつのいえ」報告

京都放課後・休日実態調査報告

参加者交流

報告者： 城陽障害児者生活労働センターを

つくる会

城陽市で昨年の夏休み期間中、市の「レスパイト事業」として開催された「なつのいえ」事業について、委託を受けた「城陽障害者生活労働センターをつくる会(みんななかま教室・共同作業所)」の職員と、夏休み期間の専任指導員から、お話を聞いた。

場所が共同作業所の使われていない3階部分で、エレベーターが未設置だったため、身体に障害のある人の利用が難しかったり、1時間あたり300円の利用料が「高い」という指摘があったりした。(153万円だけでの実施は難しか

ったため)

しかし内容についての反応はとてもよく、利用後のアンケートには、絶賛と今後への期待がたくさん綴られていた。9月に「つくる会」としてパーベQを企画した所、利用者・保護者がたくさん参加され、「普段とは違う、若いパワーに圧倒された。今後につなげていきたい」と、職員さんが話していた。

参加者からは、「もっと予算をつけるべき。どの市町村でもやれるようにしなくては」「この事業を『支援費』に当てはめると、補助金は減らされてしまうと思う。独自事業として続けてほしい」などの意見が出た。

第12回研究会(2003.2.7)

テーマ： 八幡障害児学童保育

「どーなつクラブ」報告

京都放課後・休日実態調査報告

学生の意識調査を報告の中心に

参加者交流

報告者： 「どーなつクラブ」保護者・指導員

秦・川口

学術フロンティア
ライフデザインプロジェクト
代表者 津止 正敏(産社)

2002年度から始まった研究プロジェクト(研究パートナー：キリン福祉財団・京都市社会福祉協議会)であるが研究テーマは以下の3点である。

1. 地域福祉プログラム臨床研究会

子育て部門のプロジェクトの研究成果を取りまとめ、『子育てサークル共同のチカラ-当事

者性と地域福祉の視点から - 』として刊行した(津止正敏・藤本明美・斎藤真緒編著、文理閣、2003年5月、1500部)。朝日新聞、京都新聞、京都民報、『福祉のひろば』(2004年2月号)の書評等で取り上げて頂いた。また、子どもプロジェクトと共同して「24時間保育」についてのシンポジウムを開催した。

2. ボランティア研究会

2002年度から始まった研究プロジェクト(研究パートナー:キリン福祉財団・京都市社会福祉協議会)であるが研究テーマは以下の3点である。

・ボランティアプログラムの臨床研究

研究方法的にはライフデザインプロジェクトと同様にプログラム臨床研究による。ボランティア活動が社会的評価を高めつつ各地に広がっているが、その活動が社会にどのように貢献し、活動参加者の自己実現や知識や技術の向上、人格形成などの能力開発にどのように関連した可能性を有しているのか、あるいはこの活動をマネジメントしていくためのスキルや人材、財源などの条件についての調査研究はまだ緒に付いたばかりである。こうした調査研究課題に、地域社会で現実に展開されているボランティアプログラムの臨床を通してアプローチしてみようというものである。ボランティアの困難事例(チャレンジドケース)の研究、に加えて成功事例(サクセスモデル)の研究に着手した。

・「立命館大学ボランティアセンター(仮称)」の設置についての研究

本学には既に各種のボランティア活動に参加する学生及びグループは少なくなく、また地域社会からの学生ボランティアニーズも高い。その活動支援を強化するとともに、ボランティア

スキルマッチングのためのプログラムを開発し実践していく拠点として「ボランティアスタディセンター(仮称)」に機能や役割、運営方法等について研究する。実践的には学生主体のボランティアガイダンスを企画し実践したが、その詳細は『学生とボランティア』(2004年3月、人間科学研究所)に収めた。また、本プロジェクトが提起してきた立命館大学におけるボランティアセンター設置構想については全学的な検討委員会(委員長佐藤満教学部長)が設置され、「立命館大学ボランティアセンターの設置について」と題する政策文書がまとめられた(2004年3月)。直後の常任理事会でボランティアセンターの2004年度設置が決定された。

・インターンシッププログラムの研究

ボランティア分野におけるインターンシッププログラムの開発研究。

3. 男性介護者問題プロジェクト

政府の調査によれば介護者のうち5人に1人が男性と言われている。夫婦中心の家族形態の進行からすれば、核家族化の進んだ都市部においては更に高くなると予測されるが、その実態については殆ど明らかにされていない。そのため、私たちは、介護者一般の課題に解消されない、男性介護者固有の実態や課題とは如何なるものか。どのような社会的支援策が必要とされているのか。あるいは我が国の介護保障を進める上で男性介護者問題はどのような位置にあるのだろうか、等について男性介護者の声に依拠しながら考察してみようと考え、「男性介護者の介護実態と社会的支援政策の提案に関する調査研究」プロジェクトを組織した。今年度は「男性介護者への聞き取り調査」を実施した。調査員は立命館大学津止研究室2回生ゼ

ミ・3回生ゼミ・院生・その他など約50人が担当した。45人の男性介護者への聞き取りを行い、調査報告を兼ねて2回(2003年12月8日、2004年2月1日)のシンポジウムを開催した。それぞれ100人を超える参加者を得た。調査結果の詳細についてはWEBマガジン「福祉広場」に連載予定である。

京都子育てワークショップ(2003.5.22)

テーマ:「地域ではぐくむ共同のチカラ」

プログラム: あいさつ・問題提起

子育てサークル活動紹介

グループディスカッション

まとめ

ファシリテーター:津止 正敏

(産業社会学部教授)

藤本 明美

(京都子育てネットワーク)

第4回研究会(2003.6.30)

テーマ:「第4回合同ケースカンファレンス

『心の悩みを持つ人のボランティア
について考える』

事例提供者:岩井 良哉

(京都市左京区社会福祉協議会)

長村 彰

(京田辺市社会福祉協議会)

スーパーバイザー:辰巳 朋子

(京都市南青少年活動センター

相談関連事業専門員)

第5回研究会(2003.9.5)

テーマ:「第5回合同ケースカンファレンス

『心の悩みを持つ人のボランティア

について考える』

事例提供者:米田 啓子

(京都市下京区社会福祉協議会)

藪田 浩司

(京都市中京区社会福祉協議会)

スーパーバイザー:津止 正敏

(産業社会学部教授)

制度の隙間の中で、ボランティアセンターにおいて、心の悩みを持つ人をめぐる相談は絶えることはない。今回のケースカンファレンスは、前回に引き続き、「心の悩みを持つ人のボランティア」をテーマに、「ボランティアしたい(担い手)」と「ボランティアを求める(受け手)」という両方のケースを取り上げ、困難発生の構造的要因、対応の方向性や関係機関との連携のあり方について、参加者との意見交換を通じて、検討した。

「ボランティアをしたい」事例としては、福祉関係の仕事に就きたいが、就職先がないので、見つかるまでの間ボランティアをしたいという内容であった。ボランティアグループを紹介するものの、利用者や他のボランティアから苦情などトラブルが続いた。本人も自分が「鬱」だということを自覚されている。コーディネーターは、ボランティアセンターとしてどこまで対応すべきかということで悩んでおり、他機関との連携のあり方などが議論された。

「ボランティアを求める」事例としては、心の病をもつ妻の話し相手になってくれるボランティアを求めるといふ、夫からの相談であった。しかし、妻からヘルパーに対して暴力的行為があったため、ボランティアの派遣を断念した。そのころに対して、コーディネーターはボラン

ティアを調整すべきだったのかどうか、悩んでいる。

2つの事例から浮かび上がってくる問題として、心の悩みをもつ人がボランティアの場面に登場してくるということは、心の病が一般化している今の時代性を象徴しており、社会的・環境的な問題であると捉えなければならない。それらの視点から、「環境やケアのあり方」、これらの問題に対応していく「ボランティアセンターの意義」、「ボランティアを受ける側の権利とボランティアする側の権利の相関関係」などが課題として出されたが、まだ結論には至っていない。今後もケースカンファレンスを続ける中で、具体的な対応の方向性や困難発生の構造的要因を見出したい。

最後に、報告してくださった社協職員の方から、自分が関わっている事例をこのようにまとめて、人前で報告することにより、仕事に対するモチベーションが高まったという声が聞かれた。このことも一つの成果である。

【足立陽子（社会学研究科）】

ボランティアガイダンス（2003.6.30-7.3）

テーマ： ボランティア講演会

& グループディスカッション

「ボランティアって何？NPOって？」

ボランティアブース

体験しよう - PART -

「車椅子で以学館を探検だ！」

「もし私が80歳なら・・・」

体験しよう - PART -

「そうだ！ノートテイクだ！」

講演者： 深尾 昌峰

（きょうとNPOセンター事務局長）

男性介護者問題研究会シンポジウム（2003.12.7）

テーマ： 男が介護すること

「妻を介護する夫たち」

の介護実態調査に取り組んで

プログラム：

趣旨説明

コメンテーター・シンポジスト紹介

発題1 西川四郎與工門（介護者）

発題2 富田秀信（介護者）

発題3 秋山博之（介護支援専門員）

発題4 小畑美穂&山本香織（学生調査員）

質疑応答

まとめ 津止正敏（産業社会学部教授）

パネリストには学生調査員の小畑さん・山本さんコメンテーターの津止教授のほか、当事者として西川さん、富田さん、専門家としてケアマネージャーの秋山さんをお迎えし、山科区社協の吉川さんが進行にあたりました。当日は現役男性・女性介護者、介護支援専門員、ヘルパーの仕事をしている方、行政関係者、学生調査員等105名のみなさんにご参集いただきました。

超高齢化社会を目前に、介護は女性の仕事と考えられてきた時代から、家族の形態にかかわらず男性も介護を担う新しい時代を迎えています。

西川さんは、ご自身の奥様の介護についてパーキンソン病発症当時からの話しをしていただきました。奥様の介護を続けていた矢先、ご自身が病に倒れてしまった経験から、これまでの介護を振り返り「男が介護することは本当にたいへんなことです。」と訴えられていました。

富田さんからは、仕事をしながら行う男性の

介護について「今まで、地域の人々に支えられながら私は妻を見てきた。もっと男が率直にSOSを出せる環境づくりをしてほしい。」と語られました。

秋山さんには、介護支援専門員としてさまざまな事例を提示していただき、男性介護者の現状を話していただきました。

今回の介護実態調査に取り組んでいる学生調査員の小畑さんと山本さんは、聞き取り調査で「学生さんが来るのを楽しみにしていた、こんなつまらない話を聞いてくれてありがとう。」と歓待された事に触れ、介護している男性は話ができる場所、相手を必要としていると感想を述べるとともに、老々介護は介護している方だけでなく介護されている方も不安に感じていることであると調査の中間報告を行いました。

討議に際してはパネリストのほか、当事者・ケアマネージャー・他大学からの研究者など多くのみなさまから示唆に富んだ発言をいただきました。

コメンテーターの津止教授は討議のまとめにあたって、単に困難な問題点だけでなく、多くの工夫や何よりも無理をせず積極的に社会との関係を深めながら生活の質を向上させている経験の紹介など様々な実態を交流できたことを喜びながら、男性介護者に相対的・特徴的にあらわれる問題や介護全般の問題を引き続き把握する努力をすすめ、今回の聞き取り調査をふまえて、介護に関する社会的支援のしくみ、諸政策の提言に生かしたいと述べました。

「参加してよかった」「今後もこのような問題を深め、学びあう場を提供して欲しい」と参加者のみなさんから多くのメッセージが寄せられました。

11月から進められている男性介護者実態調査は1月まですすめられ、1月31日に最終報告を行う予定です。

「男性介護者の介護実態に関する調査研究」 報告会(2004.2.1)

テーマ：男が介護すること

～学生たちが聞いた男性介護者の声～

内容：

・調査報告 - 津止ゼミ2回生・3回生

・調査へのコメント - 社協職員・

ケアマネージャー

・まとめ - 津止正敏(産業社会学部教授)

家庭内暴力の加害者・虐待者対策についての研究を継続した。修復モデルによる更生のための援助実践の理念、技法、政策、制度を開発し、研究し、実践するという「リサーチ&ディベロップメント」型の目標をたてて研究を進めている。介入的な援助モデルは罰による行動変容ではなくて、pro-activeな援助による行動変容をめざすものとしてプログラムの開発をおこなっている。2003年度もそれまでと同様に、加害者向けのグループワークを当プロジェクト代表の中村が代表世話人をつとめるメンズサポートルームにおいて実施した(京都、大阪で春と秋にかけて実施した)。また関連する相談としては、立命館大学心理・教育相談センターのカウンセラーらとともにカップルカウンセリングや個別のカウンセリングという形態で実施した。これらは今後の事例研究の基礎をなす家族臨床的研究として位置づけられている。研究代表者の中村は、2002年度に組織された内閣府の家庭内暴

力加害者更生施策検討委員会委員を 2003 年度も継続し、本プロジェクトの成果をもとにして、家庭内暴力加害対策への政策・制度提案をおこなった。さらに、2004 年度には東京都男女共同参画審議会の専門委員としても委嘱をうけ、自治体レベルでの政策にも提案をおこなった。

本プロジェクトの内容を深めるための国際的研究として、2004 年 10 月からはオーストラリアの家庭内暴力加害対策について比較研究調査に取り組みはじめた（代表者・中村）。さらに、ストックホルム大学からの共同研究の依頼をうけ、暴力、ジェンダー、セクシャリティの国際比較研究（スウェーデン・ウルグアイ・日本）の予備的研究に着手した（主に、中村、齋藤、松島）。

**学術フロンティア
家族プロジェクト
代表者中村 正（産社）**

（今後の活動の見通し）

プロジェクト所属の村本教授が主たる担当となり、2004 年 6 月に国際シンポジウムを開催する予定である。司法、心理、教育、福祉の総合として取り組まれている家庭内暴力対応について、米国の経験をもとにして、精神医学、臨床心理学、法律学からのシンポジウムを開催する。

**学術フロンティア
バリアフリープロジェクト
代表者 東山 篤規（文）**

一月あたり 1～2 回の研究交換会をもった。そこでは各自のデータを持ち寄って意見の交換を行った。

成果の詳細は別項を参照されたい。

（今後の活動の見通し）

2004 年度は、実験を続行しながらも、この間

**学術フロンティア
福祉情報プロジェクト
代表者 野田 正人（産社）**

に学会などで発表してきた資料をまとめて論文を作成する予定である。

2003 年度は Web 型地理情報システムの基本仕様の変更とカスタマイズを中心的な課題として取り組み、地域ボランティア組織との連携をはかるため、あらたに京都市西陣地区において、地域の高齢者生活調査を実施した。

Web 型の地理情報システムは、地域における生活・福祉情報システムとして、地域高齢者の家屋、個人情報と地域の福祉資源状況を管理する基本機能を備えている。2003 年度にあらたに修正を加えた点は、個人情報の登録・管理システムの部分である。これまでのシステム仕様では、一つの建物に複数の高齢者が居住する際のデータ管理機能が制限されていた。そのため集合建物が多く存在する地域でのシステム活用に問題が残った。あらためられた仕様では、一つの建物に居住する高齢者の情報管理に基本的に制限がない。また個人情報の容量を拡大し、地域ごとの必要な情報を自由に登録・管理できるようにした。高齢者の生活情報には各地域ごとの特性があり、必要とされる情報も地域差があるが、この仕様変更により個別地域の特性に応じた活用がひろがった。また選択される縮尺地図にアイコンが適正サイズで表示されるように

修正した。システム上のデータ更新を合理的にすることも課題であったが、この点については CSV ファイルで作成、保存ができるようにして簡易化をはかった。

西陣地区のボランティア組織と連携をしつつ、Web 型地理情報システムの活用をはかってきているが、当該地域の高齢者の生活実態が十分把握されていなかった。今後の連携、研究活動を進める上で、高齢者の生活実態を把握することが課題とされていた。そこで 2003 年度においては、西陣地区に居住する高齢者への訪問面接調査を実施した。聞き取り内容は地域生活に関するを中心に構成した。対象数 220 に対し、調査完了は 121 となった。この調査で得られた結果を地理情報システムの個人情報として組み込むことにより、システム活用の有用性が高まると考えられる。調査結果の地理情報システムへの組み込みは来年度の課題とされる。

また昨年度実施の京都市上京区の民生委員 (270 名) 調査の分析をすすめ、報告書の作成を行った。

(今後の活動の見通し)

Web 型地理情報システムに高齢者の生活実態調査からえられた結果を組み込み、視覚的空間的情報として、調査データが活用することを試み、地域活動支援システムとしての充実をはかっていくことになる。

学術フロンティア
高齢者プロジェクト
代表者 吉田 甫(文)

2003 年度では、音読計算を行なう学習療法が効果をもつ要因について検討を加えた。前年度

の知見から、学習療法が効果をもつ要因としては次の 2 つが考えられた。1 つは課題の学習そのものによる効果、もう 1 つは利用者とのコミュニケーションによる効果である。今年度は、この要因のいずれが痴呆を伴う高齢者の認知機能を改善するかを検討した。そのために、6 ヶ月にわたり、以下の 4 群を設定して研究をおこなった。

1 群(自己学習群):フィードバックなしに音読・計算課題のみ実施した。

2 群(消極的対話学習群):この群では、課題の実施に加え、課題に関連したコミュニケーションを実施した。

3 群(積極的対話学習群):2 群の要素に加えて、さらに課題に関連するコミュニケーションを積極的に導入した。

4 群(対照群):この群は、介入はいっさいおこなわず、査定のみを実施した。

以上 4 群に関して、定期的な認知機能の査定を行い、効果の違いを検討した。使用した査定方法は、前頭葉機能に特化した検査である FAB、認知機能全般を測定する MMSE である。これを開始直後、開始 3 ヶ月後、開始 6 ヶ月後に行った。その結果、FAB、MMSE とともに 2 群で 6 ヶ月後に得点の有意な上昇が確認された。その他の群では得点の有意な得点の上昇がみられなかった。このことより、課題の遂行と並行して、課題に関連したコミュニケーションをとることの効果を確認されたといえる。

また、前頭葉機能に関して、新たに Simon 課題を用いて、詳細に検討した。その結果、FAB の下位項目の分析から確認されたように、抑制機能が学習療法実施群で有意に上昇していた。逆に、対照群では抑制機能の有意な低下が確認

された。以上の点から、音読計算による学習療法が認知機能に効果をおよぼすとき、抑制機能が重要な役割を果たしていることが推察された。

(今後の活動の見通し)

これまでの研究知見に基づき、学習療法の効果についてさらに分析する予定である。特に2004年度は、施設のスタッフに積極的に学習療法の企画、実践に参加してもらい、学習療法実践上の問題点を検討する予定である。